

面 接 記 録

(選考対象者 中 村 健 一)

【総合プレゼンテーション】(16:40~17:10)

10年あるいは20年後に未来に輝くような県立広島大学を構築するという大きな目標のもとに、今、法人の中に2つの教育組織がつくられようとしており、地域と世界を先導する、そうした2つの異なるタイプの教育、指導理念に基づいて、それぞれの人材育成を掲げていくというところでもあります。来年度そして再来年度の2年間というのは、おそらくその2つの教育組織がはっきりとした形に見えるときであり、その萌芽期から関わった者として、やはりそれを見届けるべきではないかと思ったことが、候補者推薦を受諾した最大の理由であります。

<総括>

本学は来年度、白寿にあたる年度であり、広島・庄原・三原キャンパス、この3つのキャンパスが統合されて13年経ちます。「地域に根ざした、県民から信頼される大学」という基本理念のもとに県民の期待に応えるということで、今まで活動を行ってきたところでございます。

教育におきましては授業の満足度が、3大学統合後10ポイント程度プラスになり、一方、研究力の1つの指標となる科学研究費の助成につきましても、申請を奨励する制度を導入していることもあり、中国・九州・四国の27の公立大学ではトップとなっています。また、教職一体となったFD活動の取り組み、そして少人数ということを生かした教育指導の徹底などにより、教育・研究力において、われわれは誇れるものを持っていると思います。

こうした研究力に支えられた教育力により、就職率99.8%、そして実際に就職を決定した学生の進路満足度90.9%、それから国家試験も昨年度は5分野で100%であります。また図書館の利用率も非常に高く、さらに地域課題解決研究も今までで211件に達しており、そして地域との連携においても自治体・公的団体と包括協定を結ぶといったことが、今までの13年間の成果の1つです。しかし私たちの大学は、やはり時代の中に、そして社会の中に生かされており、今、その社会環境が大きく変質している時代の中で、このままで本当にいいのかという問題が浮上しています。

例えば、グローバル化といえますと、外国からの留学生は1983年に全国1万人だったのが、今は13万人となっております。本学におきましても、この5年間で約2倍、117人の留学生を何らかの形で受け入れるようになりました。

少子化についても、大学進学率は1983年に24%だったものが、2017年に49%、この値は今もあまり変わっていません。しかし、この49%を維持しながらも18歳の年齢人口はどんどん低下しています。2009年に121万人あったところが、2031年に達しますと99万人というように20万人以上低下するというので、大学は非常に厳しい環境の中にさらされています。

また一方では、知識基盤型の社会化というのはどんどんと進展しまして、AIとかIoTが進展し、野村総合研究所の結果では20年後、49%の現職業は消滅して他のものに替わってくるだろうと、そういう時代が予測されています。

こうした社会環境の大きな変化の中で、われわれの今まで13年間を振り返ると、やはりもっと変革を介した教育や研究あるいは地域連携をして、社会に対応しなくてはいけないと考えています。

<教育に対する課題とその克服>

私は、女子大を含めると35年間、本学で教育を実践してきましたが、その中で感じていたことは、本学の学生は真面目であり、そして非常に素直で、よく勉強する、礼儀も正しいということを実感として受けとめてきました。実際に広島県の34の企業を対象とした調査では、わが大学の学生に対するインプレッションは、協調性・献身的・礼儀正しいというところで他大学に対して高い値を示していますが、一方でコミュニケーション能力、主体性、チャレンジ精神については他大学のほうが勝っているという状況でした。

せっかくこれだけの力があるのだから、もう少し自分で行動力を持って主体的に、あるいは自主的にチャレンジしたらいいのではないかと思います。私が学長になった2013年に教育改革推進委員会を設置し、教育改革の推進をしていきました。その議論を通じて、文科省の事業である教育加速プログラム、いわゆるAP事業において本学の教育プログラムが9つの大学等の1つに選ばれ、今までの愚直力などの良いところは尊重しつつ、もう一步、プラスアルファの主体性を持った力を育てていく、自分で目的を見つけ、それを解決する力を養うという「課題探究型地域創生人材の育成」を教育目標とするに至りました。

新たな教育目標として「課題探究型地域創生人材の育成」を掲げましたが、今の学部・学科で十分に補えていけるのかということが課題となっています。私は、教育というのは組織立った教育が大事だと考えていますが、大学の先生は、個人個人で自分の授業力を改善しているだけであって、他の人と連携を持って教えていくということ、他の授業との関連性が非常に希薄であるという状況であり、学生意識調査での「全授業の70%は満足」と答える学生の割合は、実は5年前と大きな変化がありません。これは組織的な問題であり、このままの状態では、自ら課題を見つけ、自分で主体的に学ぶという「課題探究型地域創生人材の育成」は委ねられない、大胆な組織の組み換えが必要であるといった意識に到達しました。

こうしたことから、学部・学科再編はどうしても必要であり、その上でわれわれの教育目標である「課題探究型地域創生人材の育成」を遂行していくことで、地域の実践的リーダーを輩出するという県立広島大学をブランドしていくことが、再編後の県立広島大学の姿であると考えています。

一方で広島県は、もう1つの新たな教育手法による新たな大学を設けようとしています。再編後の県立広島大学では、地域を意識し能動的な姿勢を示して主体的に取り組む学生を育成する、Community Based Active Learningを主体としようとしています。新たな大学というのは、IoTを用い、地域を捉えるばかりでなく、主体的に汎用的な課題解決という力を育てていく、Project Based Learning(PBL)を主体としています。グローバル力におきましても、県立広島大学では異文化理解、知識としてグローバル化を理解していこうとしています。新たな大学では、実践的に外国の臨地体験、海外でインターンシップを行うことなど、実際に体を通してグローバルな力を身に付け、実践的な英語力を深めていくことを目指しています。また、実践力についても、県立広島大学では、AIに置き換えることが困難な、Face to Faceの地域の中で育てていく専門的な実践力を育成しますが、新たな大学では、新たな価値を見いだすイノベティブな実践力を育成します。地域に対する視点から考えますと、県立広島大学では地域の中で実践的に地域を牽引するような人を育成し、新たな大学では世界から地域を引っ張っていくような人材の育成を目指そうとしています。県立広島大学は内から変えていく、新たな大学は外から変える、このような際立った対比を持つことで、20年、30年後においても確実に必要とされるタイプの異なる2つの人材を1法人のもとに独立した大学として育成していこうと考えているわけです。

< 研究・地域に対する所信 >

研究・地域については、県立広島大学がどのような研究を進めていくのか、そして地域にどのようなかたちで還元するのが大切だと考えています。

まず、意欲的に教育と共に研究に取り組み、学生に研究の興味を喚起させるような、地域連携を意識した人材を採用、育成することが重要です。

次に、地域に根ざした研究の支援を目的として、現在5つのプロジェクト研究センターが学部横断的に成立していますが、5つのセンターを1つにくくった地域基盤プロジェクト研究センターを設立し、学生を巻き込みながら学生の主体的に学ぶ力を研究によって養成し、地域の課題解決研究を進めていこうと考えています。また一方で、宮島学研究などの地域にこだわった研究も進めていこうと考えています。

このような研究力や実践力、教育力を積極的に地域に発信することが、地域貢献の上で大きな力になると思っています。さらに現在も地域に対して公開講座を実施していますが、仮称県大エクステンションセンターを設立し、大学の持っている知識、成果、実践力を養う力をより一層地域に展開していく必要があります。例えば、次年度から文科省では60時間履修プログラム証明書発行というのが認められますので、こういった履修プログラム証明書を発行するようにして、われわれの持っている知的財産を地域に開放し、地域の社会人に幅広い知識啓発、そして実践力を育成していきたいと考えております。

< 大学経営に対する所信 >

大学経営においては、やはり人材が宝です。どのような人を採用して、育てていくか、確かな人物選考が重要であります。採用時の教職員の適性もしっかり見極めないと、大きな負の遺産を背負ってしまうということになります。定年まで1人約3億円の投資をするわけですから、社会人経験や、人物評価、昇任基準なども含めて、総合的で多層的に人を見極めることが大切です。特に、教員の選考では、単なる研究成果だけでなく、教員が大学という組織にどのようにコントリビューションするのかを意識して人材を採用し、育成していかななくてはいけないと思っております。

運営費交付金についても、減少することは間違いのないため、プロジェクト研究センターはもちろんのこと、各部局においても積極的な大型資金への挑戦をしてほしいと考えています。プロジェクト研究センターへの発展による成果に合った予算的な配慮をしていきたいと思っております。また、科研費は、インド哲学から宇宙工学まで全てにおいて、業績と研究能力を判断する上で指標にできるメルクマールであるため、科研費獲得のポイントを高くする必要があると考えています。企業からの研究資金により寄付講座や学内ベンチャー設立の推進、外部資金獲得のため、今年度より実施しているクラウド・ファンディング、古本募金、遺贈制度などの多層的な展開も行う必要があります。

さらに、組織として魅力ある授業の提供や、大学のミッションとして学生を大事に育てていくという取り組みなど、本学の魅力を積極的に発信し高校教諭の心を掴んで安心できる、しっかりした学生を育成しているという認識をもってもらう必要があると思っております。県教委（広島県教育委員会）とのタイトな連携についても、引き続き強めていかなければいけません。

また、学生は当然ですが、教職員においても帰属意識が非常に大事だと思っております。この大学の運命共同体の一人として、組織の一員だという意識を醸成するため、色々な情報開示、積極的な対話が必要であると考えています。オフィスアワーも平成24年度は19人でしたが、今は80人程度になり、さらに教職員と様々な会話をしていきたい、また、特に幹部教職員とは意識の共有化を図るため、評価シートなどの有用な手段を活用して、共にこの大学をつくっているという意識を共有していきたいと思っております。

授業の支援、事務などの作業効率化も必要であり、チュードレント・アドバイザーとか、ティーチング・アシスタントなどの制度の積極的活用や、IoTを活用した入学前学習や、本学が持っている教育コンテンツの映像化、電子出版や講義のデジタル化などの取り組みを応援していきたいと思っております。

それから、授業による教育だけでなく、オープンキャンパスや大学の広報活動などの大学業務も含めた教育活動に学生を積極的に参加させていきたいと考えています。大学の中で学生が生き生きと大学のために動いてくれる仕組み作りを積極的に行うことで、学生の帰属意識が高まるような大学にしないといけないと強く感じているからです。

< 最後に >

本学の理念である「地域に根ざした、県民から信頼される大学」になるためには、根本として、しっかりと人材育成を行うこと、そして、本学が県民から誇りにされ、県内外から注目され、選ばれる大学になる必要があります。そのためには、学生に「県立広島大学で学んで良かった」という意識を持ってもらわなくてはいけないし、教職員には「県立広島大学で働いて良かった」と感じることができる大学にすることが何よりも重要と考えています。また、このことは本学の最大の財産にならなくてはならないと思っております。

私が、もし理事長として再び選ばれた場合には、私に課せられた最後の2年間として、所信に掲げたミッションを、特にこの2つに注力して、精一杯頑張っていかななくてはならないと思っております。

どうもありがとうございました。

【個別質問項目】(17:10~17:30)

次の2年にチャレンジしたいと思ったタイミング、きっかけはあるのか。

現在、教育改革を実践しようとしているが、自分としてはまだまだ不十分であるという気持ちがある。それに加えて、非常に難しいと感じているが、教職員の意識改革を行う必要もあり、何としてもやり遂げたい。2年前よりも今のほうが危機感を持っている。

6年間という第2期中期計画の期間を通して、教育の部分についての総括をお願いしたい。

地域貢献・研究・教育の3つの中で、まずは教育が大事であることを語ってきた。また、教育というのは自分一人でやっても駄目であり、組織力だと考えている。総体として学生が「県立広島大学で学んで良かった」と感じてもらうことが理想である。教育というのは、みんなで作り上げて学生をつくっていく、自分の足りないところは、大学で一丸となり補いながら学生を完成させていくのだという意識が大切だと考えている。

最初の所信表明書の中に、教育に関することが全く出てきてなかったが。

教育は組織で管理しなければいけないと考えており、教育というのは、大学にとって一番本質的に大事な根本であることは間違いない。

教員の意識改革について、これは一番難しいことだと思うが。

気付きさせる環境をつくらうと思っている。教員がストレートに「分かった」と思うことは数少ない。周りの環境からつくっていくというのが重要であると考えている。

教員の意識改革の取組について、現時点で具体的にお考えはあるか。

教員の評価ポイントなどに、今まで以上にメリハリをつけてやっていく必要があるのではないかと考えている。反発も大きいと思うがやらなくてはいけない。私も含めて公立大学の先生の心の片隅には、組織の中で甘えてしまう部分があると感じている。

また、私自身も、こういった取り組みの先に何があるかという夢や希望を語っていきたいと思う。これまで、あまり夢というのを語らず、現実はこうだからというので推し進めていたこともあるかと少し反省している。この2年間の中で、たくさん夢を語っていきこうと思っている。

学生の満足度だけでなく、企業の受け手側の満足度などの学生の評価も大事になるのでは。

企業がうちの学生をどのように見ているかのフィードバックは、今の教育を変革する1つの大きな指標になっている。本学に対する満足度は卒業してから、色々な形で表れてくると感じている。そういった良い教育の事例を、たくさん話を聞き、そして聞いたものを私は伝えたいと思っている。卒業した後の学生の姿を、今の学生に伝えることは大事であり、本学の大きな歴史の流れを作ることになると思う。